『算数物語』二等辺三角形編

第一章 動物村

が仲良く暮らしていました。 ある星のあるところに動物村がありました。そこに 犬くん、熊さん、象くん、うさぎくん、あひるさん

う。 ました。そう、それは空飛ぶ円ばんだったのです。 か。それはだんだん大きな点となり、形をはっきり表し れ、それをじっと見つめていました。するとどうでしょ **点が見えるではありませんか。五匹は、遊ぶことも忘** ある春の日の事、はるか向こうの山の上に小さな光る その点は次第にこちらへやってくるではありません

みんなをさそうかのように、ゆっくりと。 くすると、もち来た方へ飛び去っていきました。それも をジグザグに低空飛行を続けました。ところが、 空飛ぶ円ばんは、まるでからかうように、五匹の しばら 周り

円ばんはどんどん速度を上げるので、みんなは必死で 息は荒くなりし、 つの間にか、 誰もが、 心ぞうも激しくなみ打ちます。 それを追いかけていました。 ع

うとうみんな地面に倒れ込んでしまいました。

「もうダメだ、苦しくて動けないよ。」

「あー、空飛ぶ円盤が遠ざかっていく…。」

くんがまた立ち上がって走り始めたのです。次いで、あ そんな時です。「僕はまだがんばるぞ。」と、うさぎ

ってくるからね。」 「みんな村で待っていてくれ。きっと何かをつかんで帰 ひるさんも走り出しました。

つことにしました ついに二匹の姿が見えなくなりました。仕方がない 残された犬くん、 熊さん、象くんの三匹は、村で待

界二章 旅立ち

がチラチラ舞い降りてきた日、手足をこすりながら犬く んが言いました。 い冬がやってきました。でも何の便りもありません。 して待っていました。次の日も、そのまた次の日も…。 そうこうするうちに夏が過ぎ、秋が過ぎ、とうとう寒 三匹は、二匹が帰ってくるのを、今か今かと首を長く

う。 「今頃、うさぎくんやひろさんは、どうしているんだろ この寒さでふるえていなければいいんだけどな

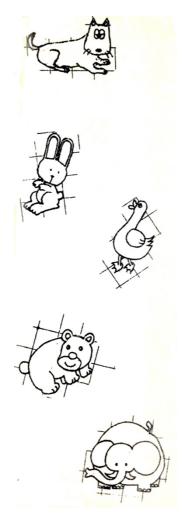
あ。 _

は悲しそうにうつむきました。 「きっと、こごえ死んでしまったんだわ。 と、 熊さん

ました。 てるよ。」と、きっぱり言うと、ぞうくんは言葉を続け 「そんな事は絶対にないさ。きっとどこかで元気に生き

ない。 じゃないか。そうだとしたら、いっこくのゆうよもなら 「もしかしたら、僕たちが助けに来るのを待っているん 今なら間に合う。

と言うわけで、三匹は旅立つことになりました。



のです。 消えていった、 彼らを探す手がかりは、 はるかかなたの山に向かって進むことな ただ一つです。 あの円ばんが

さて、三匹がまず初めに通りかかったのは、 ブタさん

の家でした。

「あのー、ここをうさぎくんとあひるさんが通らなか つ

たでしょうか。」

「そういえば、ちょうど1年前、 この道をまっすぐ走って

いったっけ。」

次はサルくんの家です。「うん、 確かに一年前見かけ

たよ。」

また猫さんの家では、

盤を追いかけてきたことを私に話してくれました。 家に入れて、ちょうどあったチョコレートケーキや、 現れたのです。二匹は今にも倒れそうなので、とにかく ルさんもとっても喜んでくれましたね。…、その時、 れから、布団をしいてあげましたら、ウサギくんもアヒ ルクと砂糖をたっぷり入れた紅茶を差し上げました。そ すっかりつかれはて、お腹を空かした二匹がドアの前に 「そうあの時はもう日が暮れようとしていた頃でした。 円

「いや、そんなの一度も見たことないね。私は、 ところがです。タコくんの家に来た時は違いました。 いつも

れで次の朝早く元気に出かけていきましたよ。」

火の見やぐらに登っているんだから、通ったら、 たのです。 に入るはずだからね。」と、そっけない返事が返ってき 必ず目

を手がかりに、次に行く道を選んでいたからです。 さあ、3匹はあわてました。なぜなら、 通る家々の言葉

「もう一度、よく考えてみてください。お願いしま

J

円ばんの方からだった。」 すると、 助けを呼ぶ声だ。…思い出したぞ。あれは、 「いや、待てよ。声を聞いているぞ。 空飛ぶ

ばんに連れさられたのです。 もはや、疑う事はありません。あの二匹は、 空飛ぶ円

たガケが三匹を待ち受けていたのでした。 上りつめました。しかし、山の向こう側には、 犬くん、熊さん、象くんは、間近に見える山を一気に 切り立つ

た。するとどうでしょう。鉄ごうしのようなものが、た した。すると…。 て横、上下にどこまでも伸びているではありません 一同一生けんめい目をこらして、中の様子をうかがいま 三匹は、ガケから下をこわごわとのぞきこんでみまし

「ぉーぃ。」、「おーい。」、オーイ。」、オー

イ!。 」

さんだったのです。 た。そう、まぎれもなく、それは、ウサギくんとアヒル のとなり、ついに目の前にはっきりと形を現したのでし こちらに近づいてくるのです。それはどんどん大きなも オリの底からなつかしい声とともに小さな二つの点が

「やっぱり助けに来てくれたんだね。君たちをずっと待

っていたんだよ。」

「さぁ、今助けてあげるからね。」

そうは言ってみたものの、どんなふうにして助け出し

たら良いか見当もつきません。

「残念ながら、出口が見つからないんだ。」

と言うと、ウサギくんは涙ぽろりと流しました。

「入る時は簡単に入れたんだけれど、出ようとしても、

この鉄のオリガ出してくれないの。

とアヒルさんが付け足しました。

そってきたのです。逃げ場所などありません。みんな そんな時です。空飛ぶ円ばんが突然三匹の真上からお

は、まっさかさまにガケから落ちました。

音とともにげきとつ…。いや、そうではありません。三 匹をくだくはずだった鉄のオリをするっと抜けてしまっ たのです。それも空気よりも柔らかく…。 たい鉄のオリのみでした。そして、ついに、ものすごい 落ちる三匹を待ち受けているのは、はるか下にあるか

りと中に浮いていたのでした。 気がつくと落ち続けていたはずの体は、 みんなぽっか

第四章 出口

ともかくも、 みんなは無事を喜びつつ、 お互いの今ま

であったことなどを語り合いました。

「ちょうど僕たちは、 一年前にここへ落とされたんだ。

でも、 不思議なことにお腹がちっとも空かないんだ。

暑くもなければ寒くもないし、トイレにも行きた

くない。変なところさ。」

年中、

「おまけに、オリの中なら思いのままにふんわりと飛ん

でいけるのよ。」

「でも、出口が見つからないんだ。」

みんなの顔は急に暗くなってしまいました。

しばらくして中の一匹がみょうなことに気づきまし

た。下りの鉄ごうしの部分にいくつかの光かがやく点が

初めて見るものでした。一同、 見えるではありませんか。一年前からここにいた二匹も 不思議に思いながらその

点を見つめていましたが、

「あれ、このひかるテープのようなものはなんだ。 _

と犬くんが言いました。

気がつくと、みんなのまわりには、 七色にかがやくテ

ープが無数に浮かんでいるのでした。 熊さんは、「もし

かして、 私たちが外へ出るために役立つものじゃないか

ら。

と言い出したのです。

熊さんの直感はよく当たるので、 みんなが喜び、 その

をやってみても成功しません。みんなは疲れ果ててしま 使い方をああだこうだと話し合いました。 いました。 ところがどれ

かも、 がくっきりと見えるではありませんか。 と思うと、また空飛ぶ円ばんが頭上に現れたのです。 ところが突然、空がまぶしいくらいに明るくなったか 円ばんのボディーには、何やら図形のようなもの

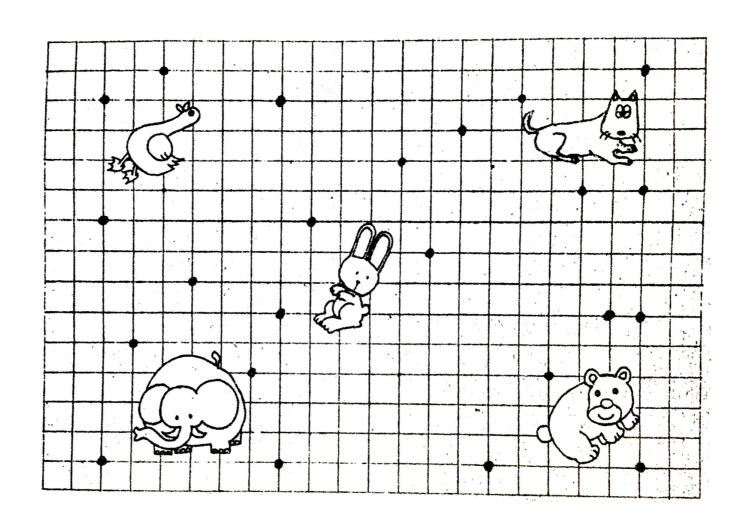
「三角形だ!。」

いきなり象くんがさけびました。

「点と点をテープでつないで三角形を作るんだ。

じめのうちはうまくいきませんでしたが、 テープをつかんでは、鉄ごうしの点と点を結びます。 に言いました。 ルさんが出口を作ったのを見たウサギくんが、 一斉に作業が始められました。まわりに浮かんでいる 偶然にもアヒ 次のよう は

点を結んで三角形を作るんだ。」 「自分の体に絶対テープを触れさせないで、1番近い点と



た、 オリに着陸したかと思うと、中から、宇宙人が何人も出 んな抱き合ってそれは喜びました。そんな時でした。 ついにみごと五匹は外に出ることができたのです。 あの空飛ぶ円盤がやってきたのです。そして大きな

ヤッテキマシタ。 ナサイ。ワタクシタチハ、コノ、ホシカラ、ハルカ30マ ンコウネンノカナタニアル、アイスクリームセイカラ、 「ミナサンヲ、タイヘンナメニアワセテシマッテ、ゴメン

ケガ、ヒツヨウナノデス。 シタチノ、チカラデハ、ドウスルコトモデキマセン。タス イマ、アイスクリームセイハ、オソロシイ、カイブツニヨ アラワサレ、 メツボウスンゼンデス。モウ、ワタク

サイゴニ、ミナサンノホシニ、タチヨッタノデス。 デモ、コノシゴトニ、フサワシイモノヲ、エラビダス、ヒ ツヨウガアリマシタ。 ソコデ、アイスクリームセイヲ、スクッテクレルモノ サガシニ、タビニデタノデス。ソシテ、コノ、 ソノタメニ、オーキナ、ユウシャ

ヲ、ミツケダスコトガ、デキマシタ。」

五匹は、宇宙人の話を聞き終えると深いため息をつきま しばらくすると、うさぎくんが尋ねました。

「今、三匹とおっしゃいましたが、それは私たちの誰と

誰と誰なんですか。」

「ソノコタエハ、ミナサンガ、イマ、 **デテキタ、** デグチ

と、宇宙人は答えました。

ヲ、

ミレバ、ワカルコトデス。

空いています。でも誰が見てもその違いが分かりませ それぞれが出てきた部分には、三角形の穴がぽっか そこで、宇宙人は言いました。 ŋ

キル、 ノノデグチデス。」 マワシテ、センヲ、 **「ココニアル、マホウノ、コンパスを、オカシシマショ** ノコリノ、チョウテンヲ、2ツトモ、トオルヨウニ、 コノ、コンパスの、ハリヲ、1ツノチョウテンニオ サンカクガタガ、アッタラ、ソレガ、エラバレタモ ヒイテ、クダサイ。モシソレガ、デ

みるみるアイスクリームの形になっていくではありませ かめてみました。するとどうでしょう、三つの三角形が 魔法のコンパスを使って、それぞれ自分の三角形を確

んか。

「ソレデハ、イヌクン、 クマサン、ゾウクン、アイスクリー

ムセイニ、キテクダサイマスネ。」

「えー、もちろん。」

三匹が勇ましく答えると、

「アナタカタノ、ユウキヲ、 タタエテ、 コレヨリ、

ヘンサンカクケイノユウシャ、ト、 ヨブコトニシマショ

ヴ。」

と言いました

二等辺三角形とは、2つの辺の長さが等しい三角形のこ

とで、アイスクリームの形ができた、犬くん、熊さん、

象くんの出口の形がそれでした。

さて、「二等辺三角形の勇者」たちの旅立つ時がやっ

てきました。うさぎくんのあひるさんも、これからの3匹

を待ち受けるものがどんなものであるかと思うと、

もたってもいられません。

「心配しなくても大丈夫だよ。僕たちは必ず無事に帰

てくるから、そんなに泣かないでくれよ。_

互いに固いあくしゅを交わし、3匹は旅立っていきまし

た。

の、毎日毎日、空を見上げてはため息ばかりついていま うさぎくんとあひるさんが村に帰ってからと言うも

しか頭にありません。そうこうするうちに、とうとう次 春が来ても、夏が来ても、秋が来ても、三匹の事

の年の寒い冬がやってきました。

でも、 ます。手はかじかみ、息が白く、こおりそうです。それ 空からは、冷たく、白いものが、次々に舞い降りてき 空を見上げていました。

のです。 はちょうど一年前に旅立った、あの空飛ぶ円ばんだった かがやきながら舞い降りてくるものがありました。 そんな、冬のある日、空から降る雪に混じって、 それ 光り

5 でいってしまったほどです。 っくりぎょうてんして、今までの不安などどこかへ飛ん さて、円ばんのとびらが開かれた時のさわぎと言った 大変だものでした。うさぎくんも、 あひるさんもび

その時のもようを解説するとこうです。

ボディから空に向けて、いくすじもの光がはなたれまし しだしました。 スクリーンになったかのように、次のような文字をうつ に合わさった時、空中を真っ白な雪が、あたかも映画の の動きに合わせてかなでられます。そしてその光が一つ 地上に空飛ぶ円ばんがおりたったかと思うと、 すると、これまで聞いたこともないような音楽が光 円盤の

二等辺三角形の勇者をたたえよ。

今ここに勝利と幸福を持ちて帰る。

音楽が一段と高なった時、 空飛ぶ円ばんのとびらが開

かれ、三匹の勇者が出てきました。

「うさぎくん、アヒルさん。私たちは無事に帰ってきま

した。」

す。 みんな駆け寄り、 いつの間にか集まってきた村の動物たちも大きな拍 かたく抱き合いました。 涙の再会で

「実はみんなに、おみやげがあるんだ。」

手を送りました。

犬くんは、ニコニコしてそう言いました。

「あのね、アイスクリームなの。」

まり三匹が進めるので、作り笑顔で、 い時にアイスクリーム?) と心の中で思いましたが、あん うさぎくんもあひるさんも顔を見合わせて、 (こんな寒

「ありがとう。ちょうどアイスクリームが食べたかった

と言って、おそるおそる手に取って、パクリ…。

ところなんだ。」

に、 も冷たくないのです。アイスクリームを口に入れるごと ていくのです。もう体はポカポカ。 て、手もかじかんでしまうほど寒いと言うのに、ちっと ところがどうでしょう、あたりは雪が舞いちってい まろやかさと甘さが広がり、それが温かさに変わっ

ぜか、 やき、またひと口かぶりつきました。 スクリ みんなは夢中でそれを食べていましたが、 幸せな気持ちになってへ来ました。 ームって、 やっぱり違うんだな。)と心の中でつぶ (宇宙人のアイ そのうちな

(おわり)

たものです。 市の蒲生第二小学校の四年二組の生徒様の文集に掲載し この作品は、 昭和五十九年度 (1984年) に、 埼玉県越谷

ために、動物のまわりにある点を結んで、作業させるため の教材が作られました。 研究授業を発表するにあたって、子どもたちの興味をひく もともと、 同じ学年の先生が「二等辺三角形」に関する

その際に、私が、この絵からインスピレーションを受け この物語を作成しました。

の仕組みが理解できたらと思った次第です。 子どもたちが、物語を体験しながら、「二等辺三角形」

休補助教員として、昭和五十九年の一月から、 の三月末まで勤めたわけですが、大変思い出深い作品です。 この当時、 私は、 教員生活のスタートを、この学校で産 昭和六十年